

災

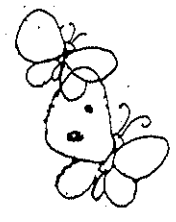
NO. 848

由倉労働組合発行
2011年
4月7日

発行責任者
加藤賢一

被災地復興に

長期的支援を!



東日本大震災の発生からもうすぐ4週間になりますが、いまだに被害の全容がつかめないだけでなく、福島原子力発電所による放射能汚染の不安は、一向に先行きが見えません。

全国的な被災地支援の広がりの中で、会社でも義援金の募集を行い、多くの皆さんにご協力をいただいたものと思います。ありがとうございます。

全国一般全国協では、4月2、3日に平賀委員長はじめ、4名が被災地を訪問し、全国協で集めた義援金を送るとともに、今後の支援について意見交換を行いました。現地では、震災の巨大さから、まずは「視察ボランティア」を受け入れるので、惨状をありのまま見て、今後の長期的な支援など知恵をかってほしいとのこと。また、ボランティアセンターで対応

できない部分へのボランティア派遣として、今後「労働相談ボランティア」が必要になるので、こうした要請に取り組むことになりました。現地ではハローワークに、労使双方からの相談が集中しているそうです。

下記の文章は、東北全労協の亀谷さんが三月十七日に書いた記事です。現地で支援体制を作るまでの経過が良く分かります。

宮城全労協でのホームページでは、震災以後の現地の様子が掲載されています。被災当事者が直接発信する情報です。関心のある方は、宮城全労協で出てきますのでぜひご覧ください。



東北全労協 事務局 亀谷保夫 (宮城全労協ホームページより転載)

最初に災害発生からの私個人の動きを報告します。たぶんそれが一番分かりやすく、また生命の助かった被災者共通の行動だと理解していただければ、と思うからです。

3月11日、事務所で作業中に地震が発生しました。事務所内で立っていたものは全て倒れ、足の踏み場もない状況でした。

直ちに携帯電話を利用し、家族、組合員の安否確認を始めました。幸いにも一番最初に連絡が取れたのは2時間後、孫からの家族全員無事との一報でした。私の不安は一気に解消され、組合員、友人知人への連絡を冷静に行うことが可能となりました。

4時間後自宅に戻りました。ごちゃごちゃになった真っ暗な部屋で待っていたつれあいと毛布をもって車に入り、携帯を付け続けました。車の中にいたのは携帯の充電とラジオからの情報収集のためでした。

一睡もしないまま12日の夜明けとなり、直ちに車で夫婦ともども津波被害地域に向かいました。塩釜、仙台新港、蒲生方面です。組合員、友人、知人への電話連絡を車中で続けましたが、その90%は不通でした。

沿岸部から二キロ手前で道路が遮断されており、その先の風景は想像を絶するものでした。家屋は見渡す限り倒壊して、整地された

造成地のようにっており、海岸線が奇妙に見通せるほど平らになっていました。助かった人々がずぶぬれのまま、瓦礫の山に立ちつくしていました。かろうじて出てくる言葉は、地獄だ、の一言でした。

その後一日中、走れる範囲で生存確認を行い、その間も携帯を付け続けました。夜、事務所に戻り、連絡の入った組合員からの安堵と喜びの声に励まされ、車の中で暖房をつけ、二ノスを聞きながら携帯を握り締めている私たち夫婦は、この被災地では幸せな部類であることを実感していました。

13日夜明けには、沖縄から安否確認の電話が入りました。中国からも激励の連絡がありました。これらの激励に涙し、遺体の数々に涙し、また生存確認の情報に喜びました。

連絡のとれない沿岸部に居住する組合員の安否確認のため、車を走らせました。途中、道路確保作業にあたっている自衛隊員が瓦礫を処理しながら、埋もれている多くの遺体を収容していました。その脇を通り、組合員の自宅に向かいました。その一キロ手前で見えるはずのない関上港が見え、倒壊した住宅と多数の船、大型トラック、タンクローリー、ヤマトや佐川などの車両が列をなして倒れ、あるいは流されて横倒しになっていました。その光景を見て、生存をあきらめました。

昼過ぎに事務所に戻って安否確認の作業を続けました。二日間、食事をしていなかったことに気がきました。これまで行動をともにしてきたつれあいが、買出しに向かい、三時間後に戻ってきました。中華どんぶり一杯百円のご飯を販売していた食堂から、お金とってごめんねと言われながら買って来たそうです。暖かいご飯を食べました。

一方、有名な複数の大型家電店は、乾電池とラジオを求める被災者に対して「災害のため休業」の紙を張り出していました。他のホームセンターは、破損した店内から乾電池など生活必需品を駐車場に並べ、通常よりも安価で販売していたにもかかわらず。

私個人は、携帯バッテリー確保のため72時間の車生活を過ごしました。そして14日昼、ようやく事務所に電気が通じ、様々な情報が集中するようになりました。

こうして15日、東北全労協の対策本部を設置しました。

地震発生の11日から15日まで、とった食事は3回でしたが、今は事務所に電気が通じましたし、正月のお供え餅が6個あるので、一週間は食事に困ることはありません。また、組合員から事務所へのおにぎりの差し入れがあり、被災地の中では裕福に過ごしているというのが率直な実感です。